



兵庫県立芸術文化センター 心の広場プロジェクト

どんな時も歌、歌、歌！ ～佐渡裕のオペラで会いましょう

事業概要と新型コロナウイルス感染対策 報告書

(2020年8月7日 初版 ※8月22日メディア掲載情報追加)

日時：2020年7月23日（木）、24日（金） 3時開演（公演時間60分／休憩なし）

会場：兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホール（兵庫県西宮市）

出演：佐渡裕（芸術監督・指揮）

並河寿美（ソプラノ）、清原邦仁、水口健次（以上テノール）、

大山大輔（司会・バリトン）、片桐直樹（バリトン）

ひょうごプロデュースオペラ合唱団（24名）

兵庫芸術文化センター管弦楽団（53名）（コンサートマスター：豊嶋泰嗣）

主催：兵庫県、兵庫県立芸術文化センター（制作）

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

はじめに

兵庫県立芸術文化センターでは、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020年3月3日以降約4か月間、すべての公演が中止を余儀なくされました。6月2日に営業を再開したのちは、感染防止策を取りながら再びお客様をお迎えするための方策を模索し、7月4日より約1か月半にわたる「心の広場プロジェクト」を開始することとなりました。

その一環として、当センターにおいて、多くのお客様に毎年ご期待いただいている芸術監督プロデュースオペラ『ラ・ボエーム』が予定されていた期間である7月23日、24日に、「希望を感じさせる公演を」開催したいという佐渡裕芸術監督の思いから、本公演を企画し6月中旬より準備に取り組むこととなりました。

しかしながら、新型コロナウイルスの感染が拡大する中、世界各地で合唱団でのクラスターが報告されたことから合唱の危険性が指摘されており、6月以降、オーケストラ等の公演は順次再開したものの、合唱とオーケストラが出演する公演はなお再開が待たれている状態でした。そのような情勢下において、本公演は、緊急事態宣言解除後、全国で初の【合唱・独唱歌手・オーケストラが出演する公演】となりました。

開催にあたっては、感染の防止を第一に考えて準備を進め、種々の対策を講じてまいりました。本公演が今後、同種の活動の再開計画の参考に資することを願い、次項より、1. 準備プロセス、2. 公演での実施策、3. 公演の成果と反省点を報告いたします。

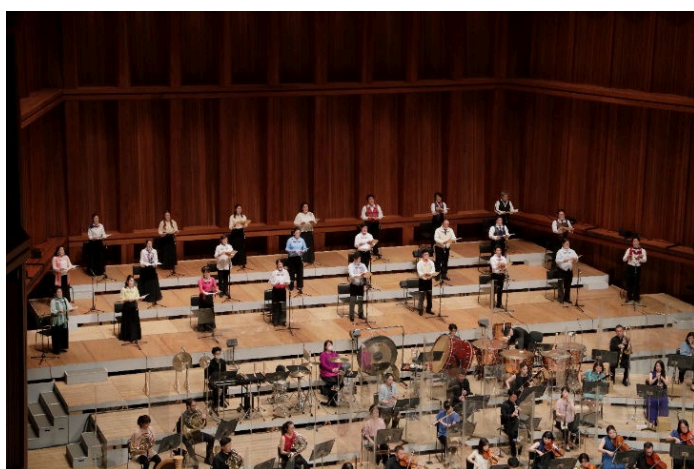
★「心の広場プロジェクト」について

➤ http://www.l.gcenter-hyogo.jp/news/2020/06/0612_KOKO%20Pro.html

★当日配布プログラム ➤ http://www.l.gcenter-hyogo.jp/img/news/2020/2020072324_program.pdf

★公演の演奏動画 アンコール「すみれの花咲く頃」より

➤ <https://www.youtube.com/watch?v=y3BdVMUVn6Q&feature=youtu.be>



公演写真より

上：合唱団 右：ソリスト

公演写真はすべて 飯島隆撮影（以下同）

1. 準備プロセス -1

●専門家との協働

開催準備を進めるにあたり、医学的専門家および工学的専門家の監修を得ることとし、科学的根拠に基づいた冷静な判断の上、妥当性のある対策を講ずることで、安全に公演を実施できる可能性を探りました。それでも危険を払拭できない場合には計画内容の変更もしくは中止も辞さない構えで臨みました。

また、公演までの準備プロセスを公開することで、この公演の成立だけを目指すのではなく、広く社会一般、特に合唱・声楽の専門家と知見と対策を共有することを重視して、メディアとの連携も含め、情報発信に取り組んでまいりました。

1) 医学

吉田友昭教授（医学博士、藤田医科大学、感染制御医（ICD））、浮村聡教授（医学博士、大阪医科大学、附属病院感染対策室長）の監修を得ました。

両氏には計画段階から当センターで立案した感染対策案について助言を受け、公演に立会って意見をいただきました。特に吉田教授には、スモーク実験、リハーサル初日、全体リハーサルとゲネプロへの立会い、オーケストラ楽員、合唱団員へのレクチャー、メディア取材への回答など、プロセスの細部に至るまで直接参加いただきました。

2) 工学

多くの研究で重要性が指摘されていた飛沫やエアロゾルの拡散メカニズム、気流のメカニズムについては、医学的専門家とは別に工学系の専門家の助言が必要と考えました。

当センター舞台技術部長の発案によって舞台上のスモーク実験を行うにあたり、建設に携わった劇場設計及び空調設計の担当者の助言を受けました。

3) 合唱・声楽

今回の公演を「共同実験」と位置づけ、感染対策と準備プロセスを広く一般にも公開・共有しながら、業界関係者、特に合唱・声楽の専門家との意見交換をしていくことを重要課題とし、松原千振氏（合唱指揮、神戸市混声合唱団音楽監督）、斉田好男氏（指揮、関西合唱連盟・兵庫県合唱連盟理事長、神戸大学名誉教授）と意見交換を行いました。また、その他の合唱団体からのリハーサル見学者も積極的に受け入れ、情報公開、意見交換を行いました。

意見交換の目的は、開催への賛同や協力を得ることにあるのではなく、当センターの考え方や対策内容について情報を提供すると同時に、多様な意見や考え方を知り、それらを包括しながら、状況に応じて修正することで、この公演の意義を高めることにありました。

1. 準備プロセス -2

●スモーク実験

当センターが実験の実施を検討していたところ、吉田教授の来館時に実験の重要性が指摘され、具体的に計画することになり、劇場設計者・空調設計者と打合せを行いました。

空調設計上、①大ホール内の空気は客席下部から天井に向かって上昇気流ができること、②ほぼ30分で入れ替わること、③音響反射板内のダクトを活用して上昇気流を増強すること、を想定し、7月9日、本公演の舞台設営と同様のセッティングを行った上で、舞台上3か所にスモークマシンを設置し、空気の流れを検証しました。

<実験1>

音響反射板前の1か所でスモークを発生。音響反射板に沿って上昇し、舞台上方や客席上方に抜けることを確認。

また、スモークの中で歌手がマウスシールドを着用して歌い、気流への影響を確認。

<実験2>

舞台上の3か所で同時にスモークを発生。舞台全体としては、空気が上昇気流に乗って客席天井方向へ移動し、約30分で一新されることを確認。

その際、客席前部から舞台上に向かって水平方向の気流ができていることを確認。



実験 1



実験 2

★実験の詳細はこちらからもご覧いただけます

➤ http://www.lgcenter-hyogo.jp/news/2020/07/07/4_utautauta_smoke.html

1. 準備プロセス -3

【実験で明らかになった課題】

客席前部から舞台上に向かう水平方向の気流が確認されたため、オーケストラの前でソリストが歌う際に、その呼気がオーケストラ方向に流れることが懸念されました。解決策として①ソリストがオーケストラの後ろ（合唱団の前）で歌う、②ソリストが立つ位置の床面を 30 センチ上げる、③ソリストが立つ位置とオーケストラの間にエアーカーテンを設営する、などの案が提示されました。

最終的に、舞台床面の隙間を利用して③のエアーカーテンを発生させることが実現。再度、スモーク実験を行ってエアーカーテンの効果を確認し、7 月 20 日に吉田教授が再来館した際に決定しました。



懸念された空気の流れ

空気を上昇させ、流入回避

エアーカーテンによるオーケストラエリアへのソリスト呼気の流入回避
(本番では写真撮影時点よりも風量を増強しました)

2. 公演での実施策 -1

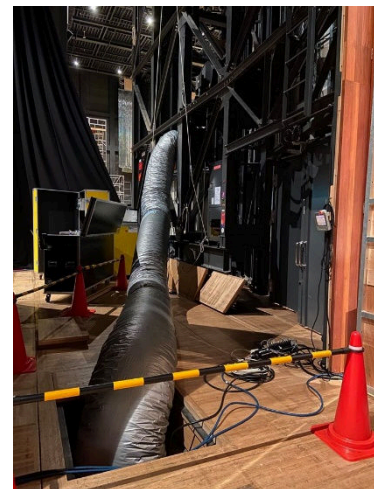
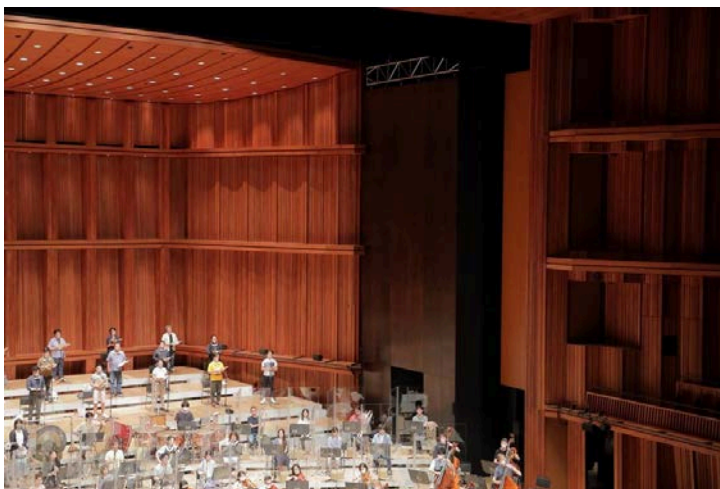
オーケストラ周辺及びフロント（お客様対応）については、6月19日に実施したセンター管弦楽団のデモ演奏会（報道関係者以外無観客／ネット配信）、26日に実施したフロント対応シミュレーション（職員、フロントスタッフ中心）、及びその後の「心の広場プロジェクト」公演で検討・試行を重ね、その成果を活用しました。

アドバイザーの助言と各資料を基に、主な感染経路を、①飛沫感染、②エアロゾル感染、③接触感染と考え、その根拠に対応した下記の対策を行いました。ただし、観客や演奏者の心理的な安心感にも配慮し、直接的に効果がない場合でも、対策を講じた場合もあります。

1) 舞台・楽屋・バックヤード（出演者・スタッフ・職員）

【基本対策】

- ・ **スケジュール**（舞台準備作業、リハーサル時間、公演時間）を短縮し、**合唱の演奏時間を短縮**（本番30分以内）。
- ・ **リハーサル回数を最小限に留め**、すべて大空間（基本的にすべて大ホール舞台。少人数のアンサンブル稽古のみ331㎡のリハーサル室1）で開催。
- ・ **音響反射板を基準よりも約8.6m後方に設置**し、舞台上のスペースを確保（これに伴って隙間ができる舞台側面にはパネルを設置して音響的なロスを低減）。なお、舞台上方の隙間は舞台上の上昇気流の排気経路として機能した。
- ・ 打合せ・公演準備で密の回避を励行（リモート会議等の積極活用）。
- ・ 関係者全員に体調管理・検温記録・手指消毒・3密回避の励行を要請。
- ・ 入館経路を統一し、入館時のサーモグラフィーチェック・手指消毒を徹底。



左：プロセニウムと音響反射板の隙間（通常より約8.6m後方）に仮設パネルを設置

右：床面から空気を取り込み、音響反射板の下部に送り込む仮設ダクト

2. 公演での実施策 -2

【具体策】

- ・歌唱時には独唱歌手、合唱共に全員マウスシールド（クリアマスク）を着用。（飛沫対策）
- ・合唱団員（前2列17名）は、演奏中、肩掛け式の携帯ファンを使用。（エアロゾル対策）
- ・舞台上でのソーシャルディスタンス（指揮者とオーケストラ奏者=3m、オーケストラ奏者同士=1.5m、合唱前方=3m以上、合唱団員同士=2m）を確保。（飛沫・エアロゾル対策）
- ・管楽器奏者の周囲、合唱とオーケストラとの境界に透明アクリル板（高さ1.8m）を設置（飛沫対策）。当初、指揮者とオーケストラとの間、及び舞台と客席との間にも設置することを検討していたが、前者は距離を大きくとることで解決できるとし、また後者は気流との関係により、最終的に使用しないこととした。



歌唱時のマウスシールド



合唱はマウスシールドと肩掛け式携帯ファンを使用

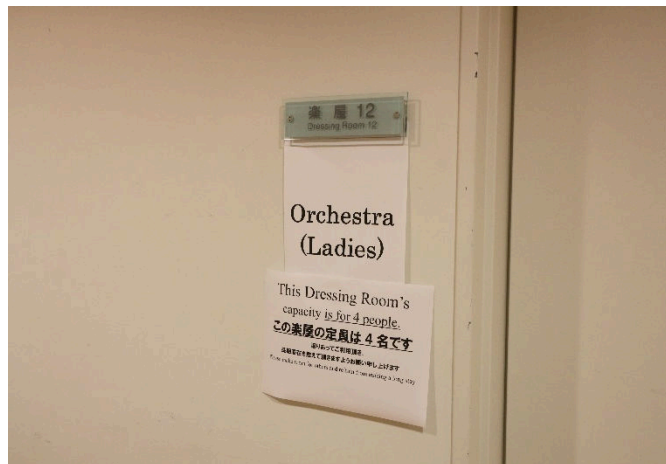


アクリル板の設置
上：合唱とオーケストラの間
右：管楽器奏者の周囲
（以上、リハーサル写真）



2. 公演での実施策 -3

- ・管楽器奏者には吸水シートを設置。(結露水处理)
- ・劇場設計・空調設計の専門家の助言によりスモーク実験を実施。(1-2 参照)
- ・楽屋定員の制限(1/2 以下)、部屋の配置の分散により、密や接触を低減。(エアロゾル・接触対策)
- ・オーケストラ・コミティ、合唱団メンバーに対して感染症対策アドバイザーによるレクチャーを行う機会を設定。全出演者・所属マネジメント・音楽スタッフに対して、感染対策の考え方と準備内容を書面で連絡し、情報を共有。
- ・今回は 2 日間の連続公演だったが、衣裳に付着したウイルスが 48 時間程度残留する可能性を踏まえ、出演者の衣裳は両日で取り換え。やむを得ない場合は、スチーマー等を楽屋で提供し、熱等による消毒を励行。



管楽器奏者の凝結水用吸水シート 楽屋定員を通常の 1/2 以下に制限



舞台裏を楽器スペースとして使用

2. 公演での実施策 -4

【その他】

- ・ 舞台スタッフはマスク・手袋・フェイスシールド等の使用を励行。
- ・ 備品・工具・楽譜・身の回り品等の消毒を励行し、共用を回避。
- ・ 楽屋ケータリングを縮小・撤去。楽屋エリアにおけるゴミ箱の一部撤去。
- ・ キャンティース（楽屋食堂）の営業時間を短縮し、座席配置を変更。

【採用されなかった対策案】

- ・ [フェイスシールド] 当初、合唱が参加することについてオーケストラ団員の不安を低減するため、合唱メンバーにはクリアマスクに加えてフェイスシールドの着用を求めるとし、4種類を比較検討し、メガネ型のフェイスシールドを使用する予定にしていた。

7月20日に合唱がリハーサルを行った際（佐渡監督と吉田教授が立ち会い）、フェイスシールドを着用した場合の音楽的なデメリットと、肩掛けファンの使用が望ましいという結論に至った。21日に、携帯ファンの効果が高いこととその代わりとしてフェイスシールドを使用しないということについてオーケストラ団員の同意を得るめどがついたため、最終的にはフェイスシールドを使用しなかった。

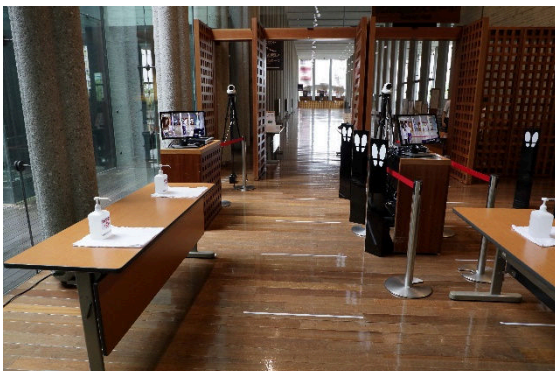
なお、携帯ファンの使用については、吉田教授より6月の時点から一案として示されていた。一方で微弱なノイズや振動があること、見栄え、電気製品を使用することに対する潜在的な嫌悪感などが懸念された。20日に示した時点では合唱メンバーにも戸惑いがあったが、上記の不安について吉田教授と相談したところ、22日のリハーサル前に吉田教授が合唱メンバー向けレクチャーを行うこととし、携帯ファンによって安全性が飛躍的に高まることと、今回の公演では絶対に感染者を出してはならないという認識について改めて説明されたことで、最終的に合唱メンバーの理解と積極的な同意を得られた。

- ・ [透明アクリル板] 舞台上の透明アクリル板の設置については管楽器奏者等からの直接飛沫の拡散防止が主な目的と考えられたが、実際の効果以上に、楽団員の心理的な安心感のためという理由もあった。同様の理由で、合唱やソリストからの飛沫を防ぐために、①舞台前面（客席との境界）と、②舞台中央（オーケストラと合唱の境界）に設置することにしていた。最終的に、①については使用しないことになった。その理由は、①客席前方10列を売り止めにしたので、飛沫防止の意味がなくなったこと、②舞台照明が入ると、透明アクリル板が鏡状になり、ソリストがその後ろで歌うことに実際的な支障が出ること、③エアーカーテンの効果を妨げる恐れがあること、など。

2. 公演での実施策 -4

2) フロント（お客様対応）

- ・観客の着席間隔を確保するため、また開場中・終演後のエレベータ周辺での密を回避するため、販売客席数・エリアを制限。1 階前方と 3 階席・4 階席は売り止めとし、1 公演あたり 2,001 席に対して使用上限は 405 席。
- ・感染者が出た場合の追跡に必要な来場者情報を把握するため、チケット販売は当センター会員に限定。非会員が来場した場合は「来場者カード」による氏名と連絡先の申告を要請。
- ・開場時間を通常よりも 15 分前倒し（60 分前）。休憩時間を入れずに上演。
- ・入退場・トイレ・コインロッカーの利用等に伴う整列時に、ソーシャルディスタンス表示を設置。館内ベンチに着席間隔確保を表示。
- ・入場者に対しマスク着用（マウスシールドは不可）、サーモグラフィー検温（発熱の疑いがある場合、非接触型体温計で再検温）、アルコール消毒液による手指消毒を要請。体調不良者・マスク不着用者の入場はお断り（希望者には総合案内にてマスクを有料販売）。
- ・チケットもぎり、プログラム配布をセルフ化（券面はスタッフが目視でチェック）。
- ・ホワイエで接客にあたるスタッフはマスクを着用（一部はフェイスシールドを併用）。
- ・クローク、喫煙室、アンケート回収、サイン会、楽屋面会、プレゼント預かり、場内物販、給水機、ビュッフェ営業を休止。
- ・大声での声援（ブラボー）を控えていただくよう要請。
- ・公演終了後にその都度、高頻度利用部分の清掃・消毒。
- ・各ホール客席・楽屋・リハーサル室・スタジオの抗菌（光触媒コーティング）加工を実施。
- ・センター内各所にアルコール消毒液（手指消毒）を設置。
- ・総合案内・ショップのカウンターにビニールシートを設置。現金を扱う際にはトレイ対応。
- ・各ホール・レストラン・スタジオに県追跡システム（QR コード）を設置。
- ・感染対策に関する説明と、協力を呼びかける館内掲示・チラシ設置を実施。
- ・アンケート配布に替えて、ウェブサイト上の投稿ページの QR コードをプログラムに掲載。



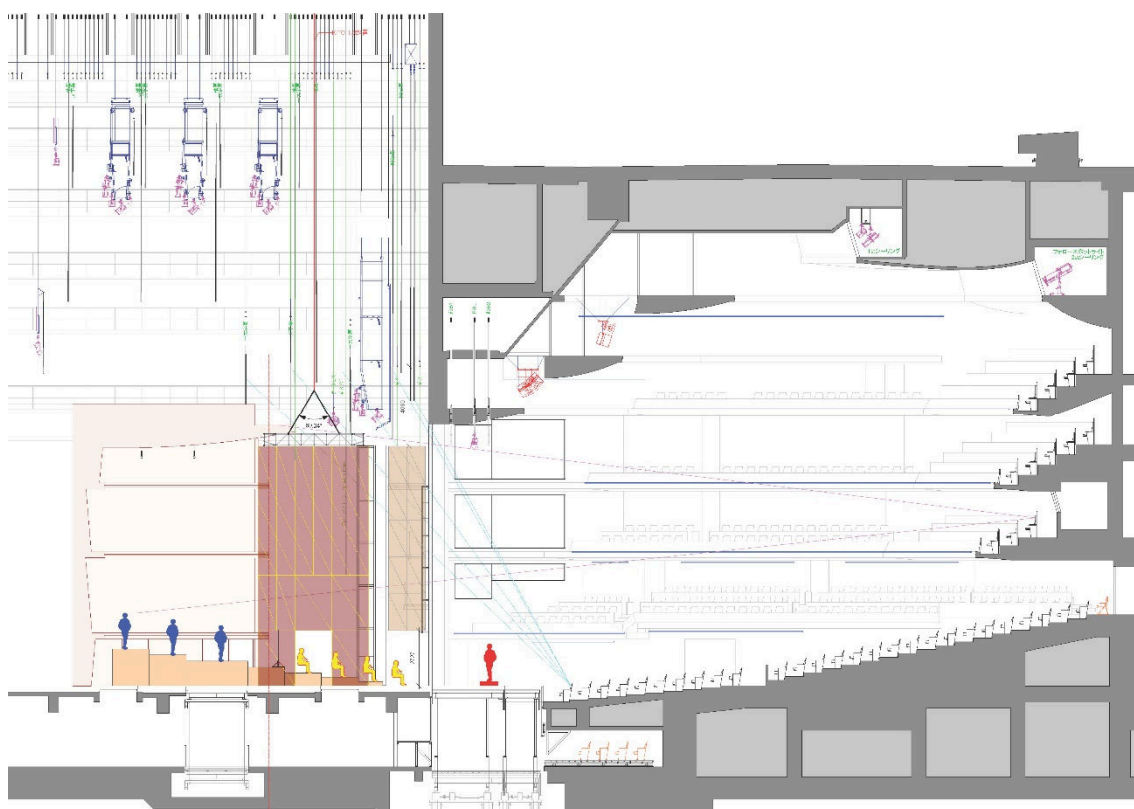
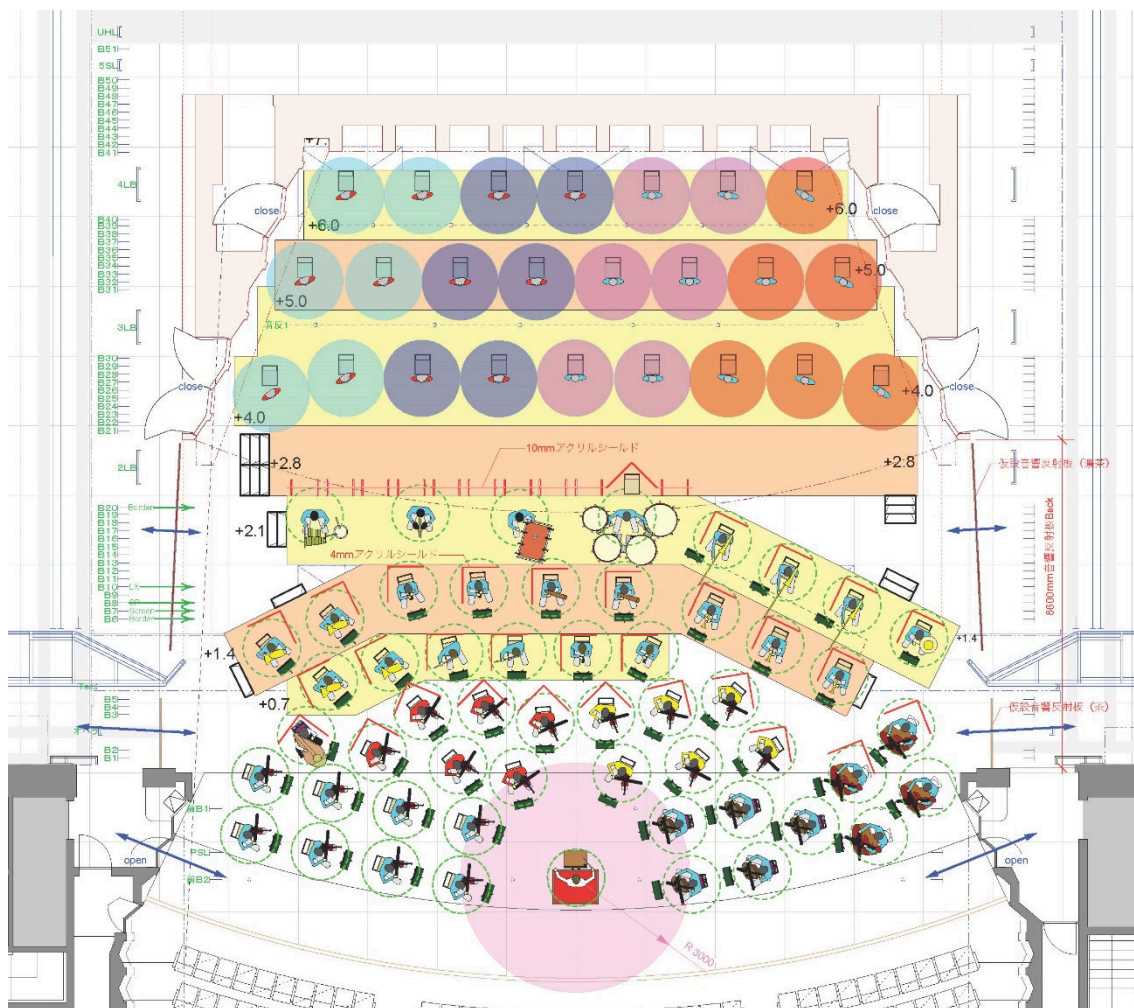
入場口の消毒、検温、整列表示



客席内の様子

2. 公演での実施策 -参考資料

●舞台図面（平面図・断面図）



2. 公演での実施策 -参考資料

●客席図

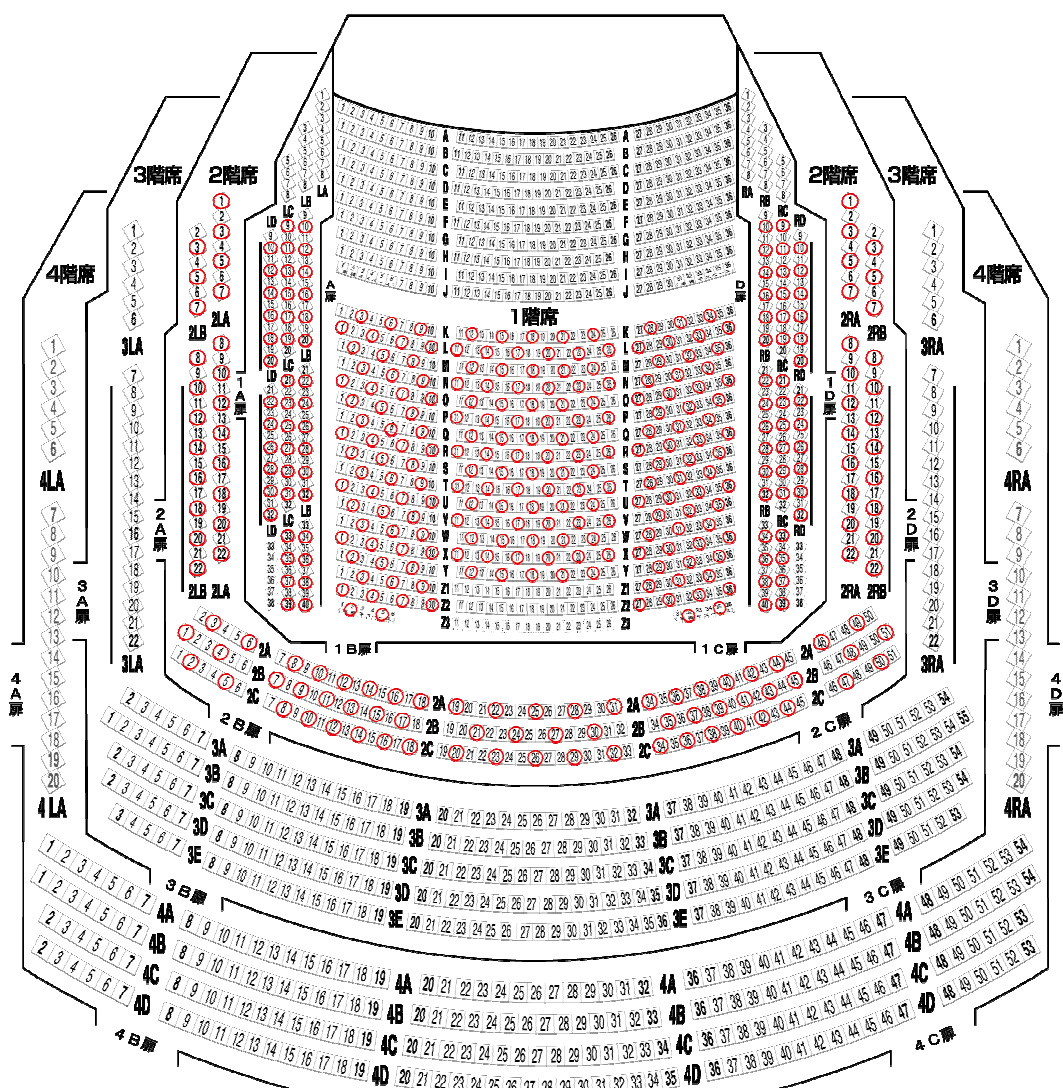
兵庫県立芸術文化センター

KOBELCO 大ホール座席表 (405席/2001席) ※○が使用予定座席

ステージ

7月23日、24日 座席表
 <心の広場プロジェクト>
 どんな時も 歌、歌、歌！
 ～佐渡裕の オペラで会いましょう

(当初の発表より変更となっております)



3. 公演の成果および反省 -1

●来場者

チケットは2公演とも発売日に完売（券売収入は兵庫新型コロナ対策準備基金に全額寄付）。

2日間で787名のお客様をお迎えしました。

お客様からは一曲ごとに温かい拍手が送られ、手拍子にも積極的に参加していただきました。終演後に、合唱団の最後の一人が退場するまで多くのお客様がスタンディングオベーションを続けてくださいました。

【来場者アンケートより（原文ママ）】

- ・「久しぶりの芸文大ホール、久しぶりの生音、感動して背筋がゾワゾワし、目がウルウルしました。この状況下で上演するために考えられた全ての事が、素晴らしいと思います。ありがとうございました。」
- ・「会場の全員が「この時を待っていた」という想いを共有しているのを感じて何度も涙がにじみました。「普通」にコンサートを楽しめる日が早く来ますように。」
- ・「楽しかったです。久しぶりの芸文センター。1時間はあっという間に過ぎました。やはり会場で聴く音楽、歌はいいですね！」
- ・「コロナ感染対策をしっかりとされていたので安心して楽しめました。」
- ・「もしかすると、世界一かも？と思われる感染対策に感動しました。オーケストラ、ソリスト、合唱団すべての皆さんが演奏できる喜びに満ち溢れ、観客も、5分の一？くらいの人数なのに、拍手がすごかった！！」
- ・「関西全域に感染が増えてきた状況で行って良いのかかなり迷いましたが、万全の対策で迎えて下さったので、とても楽しく、1時間ではありましたが貴重な時間でした。ありがとうございます。」
- ・「感染症対策が万全で、安心して鑑賞することができました。」
- ・「中身がぎゅっとなつまった、久しぶりに感動した公演でした。特にアンコールの”すみれの花咲くころ”は既に家で動画を拝見していましたが、大スクリーンでの生伴奏での音にはとても感動しました。イベントに参加されたたくさんの方の思いが、わっと胸に迫り、泣けました。マスクがぐずぐずになり、使い物にならなくなりました。感染対策も万全だったので、安心してオケの皆さんとの再会を楽しめ、佐渡監督以下、劇場を守るスタッフの皆様のこれまでのご努力に共感と敬意とを覚えます。」
- ・「久しぶりの生演奏で、とても楽しく生き返った気分です。」
- ・「久しぶりのコンサートで感動した。しかし、今後の公演のありかたに不安を感じる。」

3. 公演の成果および反省 -2

●出演者

本公演では、今夏の上演が叶わなかったオペラ「ラ・ボエーム」の公演関係者を積極的に登用しました。ただし、その際には、他府県への移動を自粛する趣旨から、兵庫県内在住者を優先するように配慮しました。

出演者のうち、ソリスト3名（清原邦仁、水口健次、片桐直樹）と合唱団メンバー全員は「ラ・ボエーム」に出演予定でした（合唱団は「ラ・ボエーム」予定60名のうちの24名）。また、「ラ・ボエーム」でスタッフとして参加予定だった木下麻由加、岡本佐紀子両氏に、今回の音楽スタッフとしての参加を依頼しました。いずれも今回の公演に対して大きく貢献しました。



アンコール～すみれの花プロジェクト（投稿画像とのコラボレーション）

●メディアへの露出(一部) ※8月22日現在の情報です。公開が終了となる場合があります。

- ・7月27日 NHK総合 Live Love ひょうご 「再び合唱の歌声を劇場に」
※7月28日 NHK総合 ぐるっと関西おひるまえ で再放送
➤ <https://www.nhk.or.jp/osaka-blog/live-love-hyogo/shitto-hyogo/433258.html>
- ・7月29日 朝日ファミリーデジタル 「ハードルの高い歌と合唱を可能にした兵庫県立芸術文化センターの熱意と努力の総合力とは？」
➤ <https://www.asahi-family.com/column/pac/25125>
- ・7月30日 神戸新聞 「医学の専門家が監修“対策万全”オペラ 煙で気流確認、歌手には携帯扇風機」
➤ <https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/202007/0013556931.shtml>
- ・8月4日 神戸新聞 「手探りの幕開け⑤合唱 制約克服 声合わせる喜び」
- ・8月6日 朝日新聞 「舞台に歌声再び 飛沫対策は」
➤ https://www.asahi.com/articles/ASN8655NRN83PTFC02Y.html?iref=pc_ss_date
- ・8月19日 毎日新聞 「合唱再開、あの手この手」
➤ <https://mainichi.jp/articles/20200819/ddf/012/200/007000c>
- ・8月21日 読売新聞 「エアロゾル対策 OK」
- ・8月18日(9月号) 音楽の友
Scramble Shot「歌の魅力を満喫した兵庫県立芸術文化センターのオペラ名曲演奏会」
- ・8月20日(10月号) モーストリー・クラシック
News at random「兵庫県立芸術文化センターがコロナ対策の報告書」

3. 公演の成果および反省 -3

●感染対策の自己評価

7月23日公演終演後、感染症対策アドバイザーの両氏と佐渡裕芸術監督、当センター職員によるミーティングにおいて、下記の要旨のとおり、本公演における対策の評価を行いました。

- ・スモーク実験、エアーカーテン、肩掛けファンなどが実現でき、十分な感染対策の下で公演を行うことができた。
- ・今後、仮に感染者が見つかったとしても、これだけの対策をした上でのことなので、公演が原因とは考えられない。委縮して公演再開を断念するのではなく、十分検証した上で、そのことを強く訴えることが大切。一人の感染によって公演活動がストップしてしまってはならない。
- ・今回の成果をもとに、今後のオーケストラ公演、観客数の増加につなげていけばよい。
- ・今後、観客数の増加やオペラ上演に向けて、客席エリアを中心としたスモーク実験、ピットを使用する場合のスモーク実験を実施する必要がある。

●主な反省点

本公演では、当センターの設備・環境を生かし、公演内容に即して感染対策を取ることができました。その中で、以下のような反省点もありました。

- ・最新情報を一元的に管理し、それに基づいて判断・実行する体制づくりが求められる。膨大な情報が流れているため、スタッフが個々に情報を集めていても、収集範囲や時間の差が生じる。専門家による勉強会などの機会を設けることも求められる。
- ・公演準備の過程で、何度か大胆な意識の転換を求められる場面があった。当初からディスタンスを確保しての演奏やアクリル板による舞台上の隔離、フェイスシールドやクリアマスクをつけての歌唱などを想定した時点で相当に思い切った意識転換をしたつもりだったが、吉田教授から、ソリストの歌唱位置に関する提案（床面を上げられないか、もしくはエアーカーテンを設置できないか）や、合唱団の携帯ファン使用についての提案（「できるだけ多く、演奏中も」）を受けて、さらなる意識転換が求められた。
- ・アドバイザーを委嘱する際には、その責任範囲について双方の認識をすり合わせておくことが望ましい。今回、基本的には「アドバイザーはあくまで助言者であり、情報と選択肢を整理していただくまでが責任範囲。そのうえで判断を下すのはセンターの責任範囲」と認識しアドバイザー陣にもある程度現実的に対応していただいたが、準備が進行するにつれ、アドバイザー陣が「生命の危険」に関わる問題と考えれば、当方が異を唱えても「どうしても譲れない」ラインが露呈することもあった。その時にアドバイザーを信頼し、その判断を尊重する覚悟も求められる。今回はその点において理想的な信頼関係を保持することができた。専門家としての助言を的確に公演の実際に結び付けることができた。

主な参考文献

- (1) ベルリン・シャリテ大学病院ほか共同声明 (2020/5/7)
〔翻訳：西南学院大学神学部教授 須藤伊知郎氏〕
- (2) ミュンヘン防衛大学報告 (2020/5/8) [同]
- (3) 全国公立文化施設協会ガイドライン (2020/5/14, 25)
- (4) フライブルク音楽家医学研究所ほか報告 (2020/5/19, 7/1) [同]
- (5) クラシック音楽公演運営推進協議会ガイドライン (2020/6/11, 12)
- (6) 吉田友昭教授 (藤田医科大) (2020/6/20 セントラル愛知響資料)
- (7) 都響検証 (6/11、12) 結果報告 (2020/6/24)
- (8) 全日本合唱連盟ガイドライン (2020/6/29)
- (9) バイエレン放送検証番組 (2020/7/3)
- ・厚生労働省「換気の悪い密閉空間を改善するための換気の方法」
- ・建築基準法、ビル管理法、興行場法

兵庫県立芸術文化センター 心の広場プロジェクト

「どんな時も歌、歌、歌！～佐渡裕のオペラで会いましょう

事業概要と新型コロナウイルス感染対策 報告書

発行日：2020年8月7日

発行：兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22

TEL 0798-68-0223(代表) FAX 0798-68-0212

URL <http://www.gcenter-hyogo.jp/>

本件に関するお問い合わせ：

兵庫県立芸術文化センター 事業部 0798-68-0223(代表)